

町内にはさまざまなコミュニティがあり、独自の活動をしています。そんな皆さんの活動やイベントをご紹介するコーナーがステイ・スマイル(笑顔のままで)です。

Stay Smile



ステイ・スマイル

Stay Smile 高原のアーティストを訪ねて

東に八ヶ岳、西に入笠山を仰ぎ見る、さわやかな高原の町、富士見。この地に生まれ、または惹かれて制作する、素敵なアーティストたちを紹介します。

【今月のアーティスト】 太田 二郎（おおた じろう）さん 版画家・富士見町在住

太田二郎さんは、東京都の出身。20年前、初めて訪れた富士見町が気に入り、度々遊びに来ていました。都内で鍼灸マッサージ師をしていた太田さんは、あるきっかけから木版画と出会い、その魅力に惹かれていきました。3年前に夫婦で富士見町へ移住。「版画工房フェンリル」を構え、本格的に創作活動を始めました。作品のモチーフは世界の神話や伝説で、目に見えない存在である妖精や妖怪などを描いています。

現在は「精霊シリーズ」の木版画に精力的に取り組んでおり、40点を超す作品ができあがっています。富士見町の民話や伝説、史跡から創作の着想を得ることも多いそうで、この土地との出会いがなければ、作品たちは生まれなかつたといいます。また、富士見高原の気候や標高といった自然環境を、不思議なほど心地よく感じるのです。こうした太田さんの作品からは、スピリチュアルな諸相と同時に、自然と人間との調和やハーモニーを感じます。他方、制作の傍ら、「版画工房フェンリル通信」を発行。これは、地元の皆さんから伺った富士見の伝説や風習と、世界に伝わる精霊との共通性をテーマに編集したもので、町立図書館で見ることができます。

太田さんは、これまでに、北杜市の考古資料館や農場、立科町のホテル、兵庫県のギャラリーで作品展を開催。2012年には富士見町がメインロケ地となった、関西テレビのドラマ「ゴーイングマイホーム」でオリジナル版画など十数点が起用されました。太古より続く歴史が身近に感じられる富士見町。日常の視点を離れ、この地に残された記憶を覗くとき、自分の世界が広がるのを実感できると太田さんは語ります。

[Information]

展覧会：「cafe 小舟」にて作品展を開催中（2014年11月末まで）

ホームページ：<http://kouboufenrir.web.fc2.com>（版画工房フェンリル）



▲クーナ 2012年 木版画
©Jiro Ota

富士見町がロケ地のドラマ「ゴーイングマイホーム」に登場する、小人の妖精の版画



▲制作風景 版画の刷りの作業



▲五風十雨農場 マニ車
サワラの木で、できた高さ2メートル、直径1メートルほどの樽に、彫刻をして絵付け。北杜市白州町周辺に伝わる精霊たちと、龍の絵が描かれている

文：前島孝一（小海町高原美術館館長・清里フォトアートミュージアム職員）富士見町富士見在住
facebook <https://ja-jp.facebook.com/koichi.maeshima.1>

Stay Smile 礼儀を意識した活動の成果

富士見中学校 女子ソフトテニス部

今年、私たち女子ソフトテニス部は、22人の1年生を迎える、2年生11人、3年生15人を合わせてFST48（富士見中女子ソフトテニス48人）で活動を行ってきました。

私たちの部は今年に入り、とても人数が増えたので、3年生が引退した今でも、1コートに17人という大人数での練習を行っています。

そこで今年は、2つのことを重視して活動を行っています。まず1つは「量」です。練習で大切なことは量です。時間が同じでも1人あたりが打つ回数を増やすようにしています。さらに打つコースや球の強弱を細かく指定して、技術の向上や1球1球を大切にする力をつけていきたいと考えています。

2つめは、「礼儀」です。私はこの大人数の団体でも、全員がピシッとしていたら素晴らしいと考えています。3年生の先輩方から、挨拶、返事、規律をしっかりと教わってきたので、大会の時や社会体育の時など、礼儀、荷物の整理など細かいこともできるようになりました。しかし、一瞬のゆるみが大人数の中では大きな失敗になってしまいます。最近はあいさつでしっかりと声が出せるよう徹底しています。

練習や礼儀を意識した活動の成果もだんだん出てきて、新人戦諒訪大会では南信大会への出場権を勝ち取りました。困難なことが多いのですが、この大人数だからこそ得られるものがきっとあるはずです。それを見つけながら、今後も力を尽くしていきたいと思います。



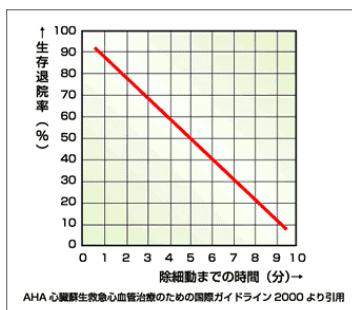
（女子ソフトテニス部部長 小林里彩子）



突然の心停止は、心臓が細かく震えだす心室細動という不整脈によって生じることが多く、心室細動を起こすと、1分経過するごとに約10%、助かる確率が減っていくといわれています。救急車が現場に到着するまでの時間はおよそ6分かかるとされており、救急車を待っていたのでは助かる確率がかなり低くなります。119番に連絡するまでに数分かかったとすれば、さらに助かる可能性は低くなるのです。しかし、AEDの登場で、人が倒れた場所の近くにこのAEDがあって、そこにいる人たちがすぐに操作をすれば、助かる可能性が高くなりました。

AEDは初めての人でも簡単に使えるように設計されています。機種によって多少の違いはありますが、ボタンを押す、あるいはフタを開けるなどすると電源が入り、あとは音声が次にするべきことを指示してくれます。もちろん日本国内に設置されているAEDはすべて日本語の音声です。倒れている人の胸をはだけ、器械の指示に従ってシールのような電極パッドをそのパッケージに描かれた位置にしっかりと貼り、器械の自動診断を待ちます。器械が電気ショックを必要と判断したら、ボタンを押してくださいという音声の指示が出ますので、ボタンを押します。

電気ショックが必要ない場合にはボタンを押しても電気が流れませんので、操作を間違って電気が流れるようなことはありません。初めての人でも使うことができますが、人が倒れたときなどは、なかなか冷静に動けないものです。AEDの使い方だけでなく119番への通報や心臓マッサージ（胸骨圧迫）なども含め、一度、救命救急の方法を経験してみませんか。



●しっかり講習を受けたい方

救急法講習会「一次救命処置」(心肺蘇生とAED)

平成26年11月5日(水) 午後6:30~9:30 保健センター

★11月4日(火)までにお申し込みください

《申込先》富士見町赤十字奉仕団事務局(住民福祉課社会福祉係) ☎62-9144



AED

●体験してみたい方

生活展(富士見町赤十字奉仕団ブース内)「AEDの使い方・心肺蘇生法体験」

平成26年11月16日(日) 午前9:30~午後1:00 町民センター

★ご自由にご来場ください

Stay Smile 子育てはたくさんの笑顔とたくさんの手で～子どもの領分を守るために～

NPO法人ふじみ子育てネットワーク ☎62-5505

「子どもの命を守る」ということ

初めて赤ちゃんを授かり、目の前にある小さな小さな命の存在を感じたとき、幸せや嬉しさとともに、誰しもが多かれ少なかれ責任の重さに気づくのではないでしょうか。命を守っていかなくてならない、という責任。事故、事件、災害…親として不安になることが社会には溢れています。

そんな中、私たち大人が子どもの命を守るために、その子の年齢では「避けようのない危険から守ってあげること」を日々考え行っています。でももう一つ大切な視点があります。子どもが「自分で自分の命を守る力」を育てるという視点です。子どもは自ら育つ力を持っています。生まれたての赤ちゃんでさえ、自分が生きていくために、そばにいる大人に積極的に関わっていく本能とも言える能力を持っています。幼児ともなると、日常のさまざまな体験を通して自分で考え体験したことを身に付ける能力はしっかりと持っています。

では、子どもが自分で自分の命を守るための力とはどんなことでしょう。困っている時に「困っている」と伝えられること、どんな方法だったら安全かと予想できること、これ以上は自分には無理だと自分の力の限界を知ること、未知のことには慎重に挑むこと、などたくさん考えられます。

これらの力はどうやったら身につくのでしょうか。それは危ないからと守ってあげるだけでは育ちません。子どもが自分で体験することで身に付きます。「かわいい子には旅させよ」ということわざにもあるように、子どもにはその年齢にあった「心と体」の体験が必要です。必要以上に「危険」から遠ざけることは、結果的に子どもが体験から学ぶ機会を奪うことになります。

『心と体に小さな怪我をたくさんして育った子は大怪我から身を守ることができるが、小さな怪我すらないように育てられた子は大きくなってから命に関わるような大怪我をする』

ふじみ子育てネットワークは、この考えに基づいて乳幼児から小学生までの活動に取り組んでいます。興味を持たれた方はぜひ、「子育てひろば AiAi」「野外保育森のいえ“ぼっち”」「小学生の放課後のあそびば」に足をお運びください。

